

未来福祉フォーラム 2017 の報告書

平成 29 年 10 月 7 日（土）13時から17時まで福岡市市民福祉プラザ(ふくふくプラザ)のふくふくホールで開催されました。今回はNPO法人まちづくり LAB 主催で後援が「福岡市教育委員会」「NPO法人 SFD21JAPAN」「ははこぐさの会」「NPO法人次世代のチカラ FUKUOKA」「福岡子ども支援学生連盟」等でした。

13時の開会のあと「特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイス代表理事」の谷口仁史氏の基調講演「アウトリーチとネットワークの必要性について」講演がありました。大変エネルギーで聴衆に訴えるものがありました。

講師略歴

学生時代よりアウトリーチ（訪問支援）を行い、卒業後、大学教授ら有志を募り NPO スチューデント・サポート・フェイス（略称 S.S.F.）を設立。平成 27 年 3 月末日現在、委託事業を含む約 16 万 6 千件の相談活動、約 1 万 4 千件のアウトリーチに携わった他、市民活動団体を含む幅広い支援機関とのネットワークの構築や「職親制度」等社会的受け皿の別出、執筆や講演活動など多彩な活動を通じて、社会的孤立・排除を生まない支援体制の確立を目指す。

休息を挟んで 15:15 からシンポジウム「福岡のアウトリーチとネットワークのこれから」が行われました。7 名の登壇者により討議とフロアからの質問で時間が足りないようでした。内容も行政に期待することや各団体の悩みなど多岐にわたりました。

コーディネーター：新村優（福岡市議会議員、NPO 法人次世代のチカラ FUKUOKA 理事長）

コメンテーター：谷口仁史（NPO 法人スチューデント・サポート・フェイス代表理事）

パネラー：小野本道治（NPO 法人 SFD21JAPAN 代表）

村田愛（グリーンコープ生協ふくおか・福岡県自立相談支援事務所主任相談員）

武部愛子（臨床心理士、スクールカウンセラー、福岡こども短期大学教授）

木村素也（ぼちぼちの会会長）

永田充（NPO 法人まちづくり LAB 理事長）

本会は 17 時に予定通り閉会しました。当日の参加者も 100 名を超え盛況であったと思います。私たちぼちぼちの会の保護者や行政関係者も参加されておられました。





谷口仁史氏の基調講演「アウトリーチとネットワークの必要性について」

2016/02/19
一億総活躍社会に関する意見交換会

資料 2

**アウトリーチ(訪問支援)を実践するNPOが考える
一億総活躍社会の実現に向けた子ども・若者支援改革**
～どんな境遇の子ども・若者も見捨てない！社会的孤立・排除を生まない総合的な自立支援体制の確立～

特定非営利活動法人
NPOスチューデント・サポート・フェイス(S.S.F.)
代表理事 谷口 仁史
(佐賀県子ども・若者総合相談センター長)
(さが若者サポートステーション 総括コーディネーター)

子ども・若者の自立支援分野には複雑化かつ深刻化する不応問題の実態に即した改革が必要

エビデンスの中から導かれた社会的な視点

「来ることを待つ」対策では本来支援が必要な若者にアプローチできていないのではないか？

生育環境の問題の解消も含め積極的かつ直接的な支援が必要なのではないか？

社会参加・自立まで責任を持って見届ける体制が必要なのではないか？

既存の支援体制の限界を補い分野横断的な対応を可能とする専門的支援
アウトリーチ(訪問支援)とネットワーク活用型の支援に関して高い専門性を持つNPO(S.S.F.)をプラットフォームとした総合的かつ包括的な自立支援体制を構築

アウトリーチ(訪問支援)と重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ

～社会的孤立・排除を生まない総合的な自立支援体制の確立に向けて～

次項以降は提言に係る補足資料(参考資料)

アウトリーチを用いることによって明らかとなった社会的に孤立する子ども・若者の実態
～急激な社会変化と背景要因の複雑化・深刻化がもたらす「従来型」支援の限界と対策の困難性～

今後の子ども・若者支援を考える上で欠くことのできない視点①
～子ども・若者の自立支援分野には複雑化かつ深刻化する不応問題の実態に即した改革が必要～

【従来型の支援の特徴①】

専門家の配置や相談窓口の開設等「施設型」「来訪型」支援が公的支援の主流であり、これらの窓口の多くは当事者の自発的な相談行動を支援の前提としている。

「施設型」「来訪型」支援の拡充に反した厳しい現実



施設に足を運ぶこと自体に困難を抱えている子ども・若者の存在

「来ることを待つ」対策では本来支援が必要な若者にアプローチできていないのではないか？

子ども・若者育成支援推進法に基づく法定協議会においてS.S.F.は県内唯一の指定支援機関としての信頼を受けるなど中核機関に位置づけられている

《地域若者サポートステーション事業によって形成された支援ネットワークを契機的に構築している佐賀県子ども・若者支援地域協議会》



2、3に即してアウトリーチを中核事業とし「地域若者サポートステーション事業」の委託を受けるS.S.F.が着目することで本来の意味での「ワンストップ型」に近い相談サービスを提供(全県域)

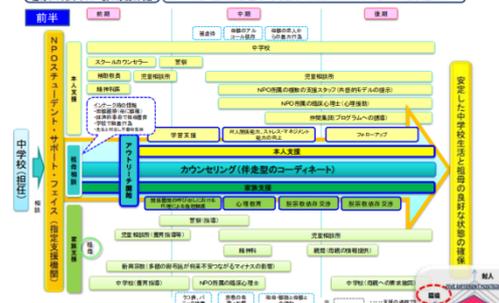
支援に抵抗感を持つ当事者への対応には関係性を重視し世代的条件も考慮
～支援介入困難度による役割分担と世代的条件を加味した関係性重視のマッチング～

「若年者向けキャリア・コンサルティング研究会作業部会(厚生労働省)」「アウトリーチ」の4分類



アウトリーチを用いたネットワーク活用型の支援によって多面的に支援する(前半)

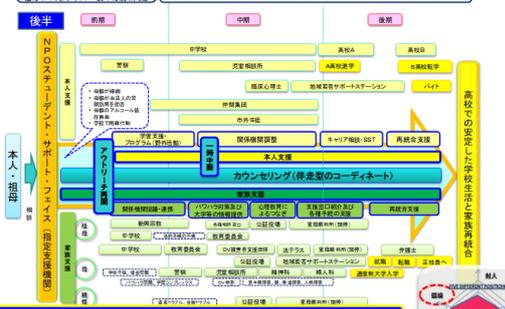
事例 母子家庭の子(14歳)
 相談時の家族構成 小学生の頃から学内での暴力行為を繰り返す。中学校では長編小説を自らのテーマとして書いてきた傾向。自問による養育では限界。原因は本人性格や障害も(母性)。



相談室で得られる情報と生活場面で得られる情報には差異がある
 逸脱行動の背景に生育環境の問題を抱えるケースもあることに留意

アウトリーチを用いたネットワーク活用型の支援によって多面的に支援する(後半)

事例 母子家庭の男子(14歳)
 相談時の家族構成 小学生の頃から学内での暴力行為を繰り返す。中学校では長編小説を自らのテーマとして書いてきた傾向。自問による養育では限界。原因は本人性格や障害も(母性)。



複数の問題に対して同時並行的にアプローチできる支援体制が必要
 適切な「見立て」に応じて支援全体の質を調整できる「伴走型」の支援

○そもそもアウトリーチを必要としているのは誰だろう。

○行政に対して要望を聞かれましたがそもそも行政に対して要望などない。望めばキリがないが、そもそも自分の問題である意識も必要である。課題はまず自分たちの中にありそれを自分たちの力でまず解決していくこと。